



JEG ニュースレター 122号

www.jegch.jimdo.com

2012年1月27日発

小さな証

傷心を抱かえて、静かな元旦を迎え、夫と詩編106編を読む中で導かれた想いは、。オルガニスト原しのぶ姉の証をお読み下さい。



JEG新年礼拝

主の導きと皆様の祈りのなかで創立19年目を迎えたスイスJEGでは1月8日、心を新たに、新年礼拝をもつ幸いをえました。



祈りのカレンダー

岐路にたつ日本と日本人のための祈りのカレンダー“Hope for Japan”のモデルになったのはスイスJEGの兄弟姉妹と子ども達です。



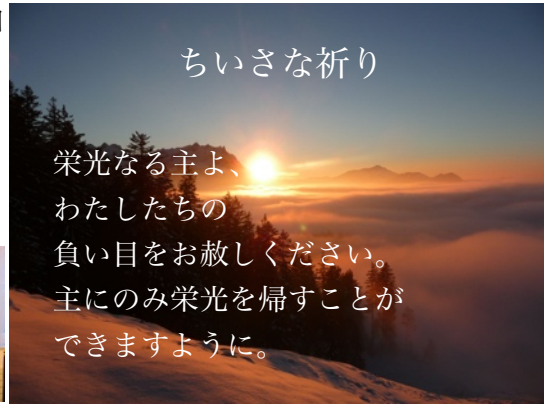
中村有志兄家族が帰国

日本での2年間の研修を無事に終え、日本で生まれた有希君とともに中村有志兄マヌエラ姉をお迎えしました。



ちいさな祈り

栄光なる主よ、わたしたちの負い目をお赦してください。主にのみ栄光を帰すことができますように。



「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」
2012年 スイスJEGの目標聖句 マルコ10章45節



明けましておめでとうございます。スイスより新年の挨拶をお送りさせていただきます。スイス教会は、今年も、心を一つにして、全能の主に感謝を捧げつつ、主の導きのもとに、一步一步、福音を宣べ伝えつつ、前進したいと願っています。

スイス日本語福音キリスト教会一同

写真は新年礼拝から

ちいさな証

元旦の朝を迎えて

原 しのぶ

スイス日本語福音キリスト教会会員



花火で賑い始めた、この大晦日の夜から新年の声を聞いてさらに夜が更けるまで、夫の手を焼かせながら長い間わたしは例年になく泣いていました。一ヶ月以上前に人の言葉から心に受けた傷を、時間と心のゆとりができた大晦日に思い出しちゃってしまいました。

去年を振りかえって見ればというと、始めてから2年間弛まず、泉のように湧き上がる動機が与えられている、教会音楽の学びのための、春にあったオルガン実技試験と、夏の、私にとって難関だったオルガン構造学とその歴史の筆記試験、それから冬にはドイツ語の2つの試験、また、数の増したオルガンでの奏楽の仕事がわたしの日常にさらに加えられて、かなり濃厚な一年を過ごしてきました。年末には日本からの若い女友達の家族と我が家で密な時間を共に過ごし、送り出した後の、久しぶりの、なにも予定のない6日間を迎え始めたのがこの大晦日でした。

そういえば12月末のニュースレターには「ご降誕という、あなたのその偉大な謙遜から、この世において忍耐と主を待ち望むことを私たちに学ばせてください。」とわたしの「小さな祈り」を捧げつつ寄稿して間もないばかりだったのに、、、。ただ悲しくて、自分の内で気持ちの折り合いもつけられないまま、元旦の朝を迎えました。

その朝は夫と詩篇106篇を読みました。この篇はイスラエルの壮大な歴史絵巻の様です。夫がよく論理的に図解や表分析にして聖書を読むのに習って、私も神と人について表にして書き出し、栄光ある神の偉大さと人の至らなさ、そして十字架がなければわたしたちは救われない存在であることを味わい、分かち合いました。

「わたしの負い目をお許してください。主にのみ栄光を帰すことができるように。」という小冊子「みことばの光」の「今日の祈り」を目にしたとき、悲しみで硬くなってしまった、私の心の部分が溶かされて、自由にされました。この編集者のとりなしの祈りともいえる、この祈りをわたしが捧げた時、主が即座に何か縛られているものから解放してくださいました。

人から傷つけられたときも最終的には神さまはいつもこの悔い改めの祈りにわたしたちを導かれることを再び体験しました。いつも必ず！私たちの魂の自由のために主がこのように導

かれます。そう、そしてわたしがいつの日か死ぬ直前にもこの祈りを捧げたいと思われました。

その日、Facebookの「お友達」が新年の祈りを伝言板に書き込んでいました。

「いかに物ごとを善く始めても、忍耐しなければ、それは小さなことであります。」(カルヴァン)

そのとおりです、神さま

忍耐の一年、そして生涯を尽くして

わたしたちが、あなたに喜ばれる善きことを
小さな一歩を重ねていくことができますように
わたしたちを家族と共に 友人たちとともに
導いてください。

この静けさから生まれた祈りはわたしの心の隅々まで沁みて広がり、根から切り落とされた葦ようになっていたわたしの魂を再び生き返らせました。カルヴァンの「忍耐」という言葉によって霊的な深い励ましを受け、もう一度立ち上がって小さな一歩をまず踏み出してみよう、という思いが与えられました。これは神の「不思議」でした。なによりもキリストがこのとりなしの祈りを通してわたしを励ましてくださっているとも感じました。

「キリストの十字架を見上げつつ、どんな痛みも自分の十字架と思って耐えて、従っていこう」と決心しても、よく倒れてしまうわたしですが、またいつでもこのように主が起こしてくださるので、神の大船に乗っている気持ちです。

そんなこんなで、すっかり出遅れてしまった、手作りおもちのお雑煮のためのもち米を大蒸籠で蒸したり、息子やひさしぶりに帰ってきた大学生の娘と共に家族揃って、結婚や男女の愛と性について聖書がなんと語っているかについて活発な議論をしたり、元気になって新年の第一日目を過ごしました。私たちの状況は変わらなくても私たちの思いが変えられる！という神の御業がこの2つのとりなしの祈りによって現されたことをお伝えしたかったです。

主にのみ栄光ありますように！！
ドイツ ボーデン湖メアスブルグにて





1、スイス日本語福音キリスト教会は、12月25日、2011年最後の礼拝を、ファミリークリスマスとして、インフォーマルなかたちで持ち、主の降誕をお祝いたしました。クリスマスは、家族であるいは、現地の教会で礼拝を守る兄弟も多いの

で、少人数の参加を予想していましたが、28名もの参加があり、大変祝福されました。

”ファミリークリスマスに参加して”

25日のクリスマス礼拝はファミリークリスマスで、温かくとてもカジュアルな礼拝でした。礼拝はクリスマスに関係したゲームから始まり、教会に初めて来てくださった方達もリラックスしていただきみんなで楽しく交わることが出来ました。温かな雰囲気の中でゲルスタ先生のメッセージを聞き、神様が大切なひとり子をこの世に送ってくださった意味を覚えました。

25日は教会ではなく、各ご家庭でクリスマスのお祝いもされた方も多くいらっしゃいましたが、それぞれの場所で主の誕生を祝い、私達の救いを改めて感謝し、喜び溢れたものであった事と思います。 O.Y.

2、第19回スイスJEG総会によって承認された役員会提案の教会予算十分の一献金の送金作業が、12月末、会計によって無事完了致しました。献金先は、一昨年同様で、ウーン高木牧師支援会、神学生・菊地祥彦兄、日本国際飢餓対策機構www.jifh.org、内村伸之牧師です。なお、日出ずる国コーナーにて、菊池兄からの礼状とともに被災地レポート、また、高木牧師支援会から作田兄から礼状が届いていますのでお読みください。

3、スイスJEGでは、2012年の新年礼拝を1月8日に持ちました。”神と主イエスキリストのしもべ”をテーマにゲルスタ牧師が、

(通訳はクツツ・ルツ師) ヤコブ1:1-4、5:19-20から解き明かされ、ヤコブの手紙の書かれた目的を学ぶ事ができました。このメッセージは次のURLをクリックしてお聞き頂けます。http://jeg.meielisalp.ch/JEG/Message/20120108_Gerster.wma

4、新年礼拝において、スイス教会の支援する菊池神学生が所属する、宮城県利府キリスト教会が被災地において展開するオアシスライフ・ケアへの義損金が募られました。その義損金は1月12日に里帰りされた本園万子姉に託され、15日の利府教会の礼拝に参加された姉によって、教会員からの励ましの手紙とともに直接手渡されました、みなさまのご理解とご支援を心から感謝します。



5、茨城県の前川製作所にて2年間の研修を受けておられた中村有志兄が、日本で生まれた有希君とマヌエラ姉とともに昨年末帰国され、新年礼拝に家族揃って元気な姿を見せてくださり、歓迎を受けられました。中村兄ご家族はマヌエラ姉の実家に当分住み、スイスJEGの家族の一員として教会生活を

送られます。

6、OMF、リーベンツェラーミッション、Campus für Christus による共同プロジェクトとしての卓上カレンダー”HOPE FOR JAPAN”(独語)が完成し、制作者のブラザー直美姉によって届けられました。この美しいカレンダーのモデルになったのが、スイスJEGに集う兄弟姉妹と子ども達です。毎月、日本と日本人、そしてそこに生きる教会の課題が書かれており、卓上に置いてお祈り頂こうとの目的で作られたものです。受付にてお受け取りください。



7、今村泰典兄のお母様の今村幸子姉は1月17日、日本時間午前4時14分に母教会の牧師や兄弟姉妹の見守るなか召天されました。深い悲しみの中におられるご家族の上に主の豊かな慰めがありますようにお祈り下さい。今村兄は1月18日に日本に到着され、空港からそのまま教会に向かい、12時半からの葬儀、すべてを主の御手の中、滞りなく済ませる事ができました。皆様のお祈りを感謝します。



8、昨年のケンブリッジでのヨーロッパ・キリスト者の集いで、証とコンサートをされた福島県出身のピアニスト赤津ストヤノフ樹里亜姉のグラビア記事が掲載された”百万人の福音”12月号が樹里亜姉から送られてきましたので、受付にてお尋ね下さい。修養会後のケンブリッジでのチャリティー・コンサートの写真は松林兄撮影によるものです。

9、ケルンボン日本語教会の林原泰樹牧師は、3年半の任期を終えられて、ドイツでのお働きを1月29日の退任礼拝をもって終了されます。林原牧師は、在任中、最愛の娘さん玲羅ちゃん(リン)が召されるという身を切られるような辛い体験をされましたが、玲羅ちゃんが愛したキリスト者の集いにも献身的にご奉仕下さり、善き足跡を残されました。心より感謝申し上げます。

10、オーニングー宣教師およびラシェンコ・ベラ宣教師からの Rundbrief、工藤篤子メールマガジン181号、吉村美穂NL58号、井野葉由美メールマガ83号、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語教会月報、ケルンボン教会月報、ルーマニア川井牧師の週報、ミラノの風、イザール通信、在欧日本人宣教報告67が届いています。お読みになりたい方、定期的にお受け取りになりたい兄弟は松林までお知らせください。



新年礼拝後の愛餐会のスナップ：新年に相応しく、教会員によるお餅：あんこ餅、きなこ餅、おろし餅などを和気あいあいと頂きました。

日出ずる国から

“私たちができること”

宮城県は利府キリスト教会の
菊地祥彦兄から

JEGのみなさん、こんにちは。この度は義捐金をお送りくださり、本当にありがとうございました。みなさんの尊い捧げものに、心より感謝申し上げます。

お捧げいただいた義捐金は、私の教会（宮城県にあるオアシスチャペル 利府キリスト教会）で行っている被災地支援の働きに用いさせていただきます。特に、現在被災地で切実なニーズとなっている「生活再建」と「心のケア」の支援のために使われます。



東北のことが徐々に忘れ去られていく中で、みなさんからの義捐金は本当に嬉しいです。とても励まされます。先日、スイスから送られた支援金を宮城県・石巻市の養殖復興・支援団体「海友支援隊」に直接お渡ししました。その際、スタッフの方は目に涙を浮かべながら、「本当に有難いです」と感謝していました。



その方もこうも仰っていました。「震災から日が経ち、徐々に被災地のことが忘れ去られていると感じる。そんな中、まだ被災地を覚えて助けてくださる方がいるのは本当に嬉しい。支援金が送られてくると、それを手に取って毎回スタッフたちと涙を流してしまうんです。そこには支援金の

額以上のメッセージが込められています。」

東北のテレビや新聞では、今でも震災関連のニュースが多く報道されますし、日常会話の中でも震災のことを多く耳にします。しかし、東北地方を離れると震災の報道はどんどん減り、話題にのぼることも少なくなったと聞きます。海外だと震災関連の



海友支援隊のみなさんと

うな話を聞くととても悲しい気持ちになります。私たちが関わっている被災地の方々も「忘れられることへの恐れ」を強く持っています。

私たちが被災地のためにできる小さなことの一つは、被災地の情報・声を出来る限り発信し続けることです。このことは大きな効果を生み出すと考えています。私たちが取り組んでいる活動をWEBサイト(<http://oasislifecare.org>)を通して定期的に情報を流していますので、ぜひご覧ください。

みなさん、東北のことを忘れずに今も祈り、また実際に助けの手を差し伸べてくださったこと、本当にありがとうございました。これからもお祈りよろしく願いいたします。

JEGのみなさんの上に主の豊かな祝福がありますように。

菊地祥彦 <football0218@gmail.com>

“スイスからの応援に驚いて、”

三陸石巻は
海友支援隊から

初めまして、大変お世話になります。オアシスライフ・ケアの菊地様より紹介していただきました石巻金華ほや・帆立の養殖漁業を支援させていただいています海友支援隊の稲井と申します。

遠いスイスの国から支援いただき大変驚き、感謝いたしております。浜の漁民の人達にもスイスからの応援の件を伝えましたら驚いていました。

東北の海岸線は津波にて我々も想像を絶する光景でしたが、皆様の力の御蔭で漁

民の方々も徐々に前を向き歩み始めております。

我々も微力ではありますがお手伝いをしていきますので何卒、長い応援をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



一般社団法人海友支援隊

稲井・阿部・篠田・渡辺

www.kinka-hoya.com

三陸石巻の復興支援プロジェクトの支援基金に一口でも参加されたい兄姉は本園万子(かずこ) 姉 kazuko.enzler@swissonline.ch を通じてお申し込み頂けます。姉の日本の口座より、僅かな手数料で送金できます。

“46年目の家庭集会”

大阪は堺市の
唄野隆先生から

毎年やっている私たちの家での新年家庭集会が、46回目になりました。その家庭集会では、KGK(私



がずっと育てられてきた学生伝道団体、スイスにも兄弟団体があります)の主事として以前奉仕して下さっていたマイリス・ヤナツイーネンさんをお迎えして、ダビデの家庭からいろいろ学び、参会者みなで語り合うことができ、感謝でした。

ダビデは、道徳的な模範にはなれなかったが、神の恵みのモデルとなったことを示されて、感動しました。ダビデのことを子どもたちにどう教えますか、という質問を投げかけられ、考えさせられました。

日本は、今年は例年以上に寒く感じますが、年のせいでしょうか。東北、北海道では雪が多い、と聞いています。災害地のかたがたのことを思い、主の御守りを祈っています。

唄野隆・絢子 <t_baino@ybb.ne.jp>

”5人のために”

東京都は町田市の

クンツ・プリシキア宣教師から

スイスJEGのみなさん、明けましておめでとうございます。

私が属する松見が丘キリスト教会では、昨年末、素晴らしい体験をいたしました。そのひとつはクリスマスに76才になる男性が洗礼を受けたことです。彼の奥さんは召されるまで、ずっと夫の救いを祈り続けてきたことでした。そのことをきっかけに、2人の男性も洗礼を真剣



に考える様になりました。また、長年教会にいられていた80歳の女性は、入院中に洗礼を受ける決心をされました。一人の若い女性(学生)は現在洗礼のためのレッスンを受けています。

洗礼は、日本人にとって、とても重い決断です。というのも、キリスト者になるということは、自分が属しているグループから離脱し、一匹狼になることさえ覚悟しなければならないからです。日本人は、個人として行動するより、集団に属し、その意思を体現する事を望むからです。しかし、神にとって不可能は存在しません。どうか、この5人のために祈り下さい。

Priscilla Kunz priscillakunz@yahoo.co.jp



ヨーロッパの

日本語教(集)会から

困難を覚えている教会のために

パリ教会は
作田銀也兄から

スイス日本語福音キリスト教会の皆様
主の尊い御名を賛美いたします。

昨年、御教会は二度にわたりウイーン日本語教会高木牧師支援のための献金をお送り下さいました。ニュースレターの紙上をお借りして感謝申し上げます。主の祝福が御教会の上に豊かにありますように。

個人、法人からも沢山の献金が寄せられていますが、主にあるヨーロッパの群れ(教会、集会)が困難を覚えている教会のために祈り、また祈りと献金で支えて下さることにより支援会が成り立っている事は本当に素晴らしい、主に感謝いたします。

将来、同じような状況が生じた時の力強い励ましになります。これまでに祈りと共に献金で支援下さった教会、集会は次の通りです。プリーネ祈りの家、ブラッセル日本語プロテスタント教会、北ドイツJCF、オランダJCFN(アムステルダム+南部)、ケルンボン日本語キリスト教会、マドリッド日本語で聖書を読む会、スイス日本語福音キリスト教会。

昨年2月、2年間の目標24000ユーロで発足した支援会ですが、既に17000ユーロの献金が捧げられています。昨年3月の東北震災のために多くの祈りと支援の課題が与えられた中で、なお、ヨーロッパにおける福音宣教のために祈りが続いている事は素晴らしいことです。今日、牧師の交代やそれに伴う無牧の群れが増えていることに鑑み、それぞれの教会がお互いに祈り合うことの大切さを痛感いたします。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのものの中にいます、すべてのものの父なる神は一つである。」

主に在って 高木牧師支援会
[sakuta <gysakuta@free.fr>](mailto:sakuta@gysakuta.free.fr)

”開拓伝道のために”

フランクフルト日本語教会は
田辺正隆牧師から

スイス日本語福音キリスト教会の皆さんへ

2012年という新しい年を迎え、はや一ヶ月が経とうとしていますが、皆さん、いかがお過ごしですか。松林兄から送られて来るニュースを拝見しますと、新しい方々も加えられ、主にあって、ゲルスター先生ご夫妻を中心に、生き活きと教会生活を送っておられるように見受けられます。本当に感謝です。嬉しい限りです。



私どもは、一昨年の6月にスイスの群れを辞してフランクフルト教会の専任となつてから一年半が経過しましたが、今は開拓伝道をしているような状態です。

私は1963年に神学校を卒業した時、開拓伝道を志していました。神学校の二年生の時、スイス人宣教師のRoesti師に頼まれ「いのちの道」というトラクトの編集に携わっていました。(このトラクトはスイスのLändliにあるDiakonisse団体で発行していた“Volksblatt”というトラクトの姉妹紙です)。

私は、その年の秋に結婚を控えていましたが、Rösti師と共に東京都内に伝道地を探していましたが見つからないままでした。丁度その時、川崎市の東生田キリスト教会(現生田丘の上キリスト教会)から“井戸垣牧師が癌の術後療養のため牧会から離れなければならないので後任として来て欲しい”との要請がありました。既成の教会ではなくゼロからの伝道を願っていた家内(当時の婚約者)はその時失望したと後で洩らしていましたが、導きと信じてお受けしました。当時の東生田教会は私どもを含めて会員数が16名でした。しかし、とにかく開拓伝道ではありませんでした。

生田で25年という長い間伝道した後、埼玉県の蓮田キリスト教会に赴任しました。これも50歳代のうちに新しい伝道地に遣わされたいという兼ねてからの願いが叶えられ感謝でした。蓮田教会は赴任当初会員が40名近くだったと記憶しています。

蓮田教会で奉仕を始めた翌年にドイツのデュッセルドルフ日本語教会から1993年に牧師として来て欲しいとの招聘がありました。そして、三年の準備期間を経て、私と家内、三男の証夫の三人で、予定通り1993年に60歳の時、ドイツに来ました。デュッセルドルフ教会も会員が40人くらいの既成の教会でした。

そして今、期せずして、かつて志していた開拓伝道に携わらせていただいているのだと思っています。主の導きはまことに不思議です。教会は小さく弱く、私どもは年をとって弱くなってきました(幸い気力は衰えていませんが)。本帰国(日本へか天国へか)も視野に入れながらの日々の歩みです。

しかし、今年はLosungenから素晴らしいことばを与えられ励まされています。

「わたしの恵みは、あなたがたに十分である。というのは、わたしのちからは、弱さのうちに完全に現れるからである。」(IIコリント 12:9)

真実と力に富み給う主を見上げ抛り頼みつつ歩んでまいりたいと思います。どうぞ、私どもと教会のためにお祈りください。私どもも祈っています。